

貧困による栄養不良の改善を

AMDA (アジア医師連絡協議会)

巡回医療と栄養給食の配給活動

著しい経済成長が脚光を浴びるミャンマーはその反面、貧困や病気などの深刻な社会問題を抱える「世界最貧国」でもある。しかし、他の東南アジア地域に比べミャンマーで活動する非政府組織(NGO)は極端に少ない。軍事政権による人権弾圧がさかんに報じられ、民主化運動指導者アウン・サン・スーチーさんも「援助は軍政の利益になる」としていることが大きな要因だ。また人道的緊急援助が必要とされる旧ユーゴやソマリアなどとは違い「まったく援助されないわけではない」というAMDA調整員との状況が、援助機関をさらに遠ざけているという。そのような中、様々な現実な戸惑いながらも活動を続ける日系NNGOを紹介する。

◇アレユワ給食センター

午前十時三十分、村のあちこちから子供たちが診療所の近くにある給食センターにやって来る。食事を始めるのは午前十一時三十分から。子供たちはその時間が待ち過ぎて仕方がない。

栄養給食は月、水、土曜日、昼と夕の週六回行われる。給食は村のボランティアたちの手によって作られ、ごはんは鳥肉と野菜の炒め物、豆のスープなどがよく給仕されている。昨年センターを開設した時はほぼ全員が栄養状態が悪いと診断されたが、現在では何人かの子供たちが正常と判定されるようになった。

ミャンマー首都ヤンゴンより北三百キロ、バスで約十四時間の山あいに、メティラという地域がある。AMDA(アジア医師連絡協議会)では一九九六年より、巡回医療や



給食センターで昼食をとる子供たち。センターといってもきちんとした建物はなく、アスファルトの上にござを敷いて座っている。

の五歳未満の子供に対し栄養測定を実施したところ、全体の三十八名中、重度栄養失調が五名、軽度が二十一名で、正常はたったの一名だった。これらの子供の親の平均年間収入を調査したところ、約七千チャット(一チャット、約一八〇USドル)だった。ちなみに同地域で家族三名(両親と子供一人)が生活するのに必要な年収は少なくとも四万チャットだ。

ミャンマーでは感染症、特にマラリア感染が多く、死亡率の一位でもある。この背景には貧困による栄養状況の悪さがある。栄養状況が悪いと感染の発生率が高く、予後も悪い。また感染によってさらに栄養状態は悪化し、子供の成長障害を招いたり、死を招く結果となる。

また母親の栄養状況も子供に重大な影響を及ぼす。栄養状況の悪い地域では妊婦の死亡や未熟児が増加する。また母乳による十分な栄養が与え



村のボランティアに手を洗ってもらう子
ちよっぴりこわい?!

「本当に変えていくのはあなたたち」

◇住民の意識の向上を

栄養給食を実施するうちに、血便を伴う下痢や水溶性下痢を発症する子供が多いことが分かり、衛生状態の悪さが明らかになった。そこでAMDAでは、疾病を予防するための衛生指導も始めている。

この地域では手でごはんを食べる習慣があるが、その手は常に汚い。そこで、手を洗う習慣を付けさせるため、ボランティアが強制的にごはんを食べる前に子供たちの手を洗っている。

手を洗わせるといっても水道があるわけではなく、井戸水を大きなタライに汲み、ボウルで水をすくって洗わせるものだ。もともと手を洗う習慣のなかった同地区では、子供たちだけでなく、大人にとっても戸惑いは大きい。

住民の戸惑いに関係者にも不安が募る。住民は手を洗うことの意味や衛生環境の大切さを理解してくれているのだ

善方法を指導することも、もう一つの目的としている。

ろうか。今までずっと汚いと思っていなかったことを「汚い」と教え、新しい習慣を付けてもらおうとすることに「価値観の押し付けでは」との疑問も頭をよぎるといふ。

NNGOの活動は現地の生活に深く入り込んでいく、文化や習慣、価値観といったナイーブな問題におつかることも避けられない。「外国人としての限界」を感じている時も多いという。AMDA現地調整員の宮本美紀さんは「一人でもかかってくれる人がいれば」と語る。

試行錯誤を繰り返しながら、AMDAの活動は続く。しかし、その活動が実を結ぶかは住民自身の理解と意識の向上にかかっている。いなくならたら元に戻ってしまったのでは、意味がない。「本当に変えていくのはあなたたち、と伝えたい」。宮本さんの静かな語り口に強い意志がにじむ。